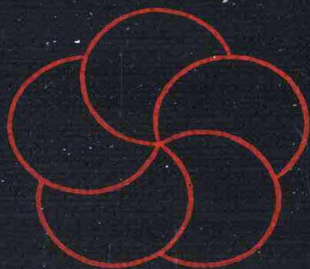
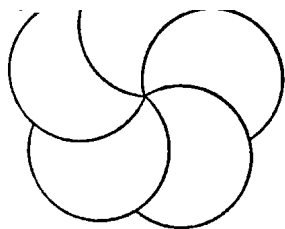


10

日本文学の歴史



和魂洋才



10 和魂洋才

日本文学の歴史

吉田精一 下村富士男 編



……切—取—編……

日本文学の歴史（全12巻）

第10巻 和魂洋才

昭和43年2月20日 初版発行

定価 650 円

編 者 吉 田 精 一
下 村 富 士 男
発行者 角 川 源 義

印刷所 中光印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所
製版所 株式会社 高木写真製版所
発行所 株式会社 角 川 書 店
かど かわ しょ てん

東京都千代田区富士見2-13
振替 東京 195208 番
電話 東京 (265) 7111 番

© Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

新世紀の開幕

三國干渉來たる 剗刀外相のリアリズム 閔妃暗殺のクーデター 産業革命 金權政治
骨董熱と職事情 博文館王国 まむしの周六 パノラマから活動写真へ 二十世紀の予言
北清事變 自由党の死 日英同盟

九

日本主義とコスモポリタニズム

「自主独立」の日本主義 センチメンタルな論客 美術學校を追われた天心 アジア民族の運命
「太陽」文學欄の主宰者 断念された留学 『美的生活を論ず』 日蓮への傾倒 インド旅行から得たもの 「アジアは一つ」 コスモポリタンの晩年

三

近代俳句の開花

子規の従軍 船上の咯血 松山の俳句熱 「ホトトギス」創刊 三十而立 一年目の危機
「ホトトギス」の束縛 子規の死 虚子・碧梧桐の対立 俳誌から文芸誌へ 碧梧桐の新傾向
虚子の俳壇復帰 闘志いだきて丘に立つ

六

美を夢みる人々

ロマンチズムの源流 「文學界」と藤村 「明星」と鉄幹 ふたりの女弟子 晶子の情熱

二

『みだれ髪』 「君死にたまふことなかれ」 乱臣なり、賊子なり 星と董と 泣董と醉茗
 『海潮音』の訳業 『有明集』の象徴詩風 偏奇なる芸術家の出現 女人賛仰 天才泉鏡花
 『歌行燈』の世界

ゾライズムの呪縛

二三

日光のKとT 花袋文学の原像 モーパッサンとの出会い ロマンチストからリアリストへ
 天外の写生文 紅灯のかげに泣く女 和製ルーゴン・マツカール 天外のゾライズム 荷風
 の野望 ソラとニーチェと 牛門の代表選手風葉 時代の代弁者 新時代の「青春」 武蔵
 蔵野の詩人独歩 驚異と運命と 独歩と性欲の問題 『春の鳥』の意味 千曲河畔の物語

地底の記録

二四

曲学阿世と泥棒 社会主義資本家 コムミユス、ソシアリスム 虚無党恐怖症 社会党の
 機関誌 つつまれた生育 嗚呼文士涙なき歟 『高島炭礦の惨状』 最暗黒の東京 一葉
 と天涯茫々生 下流細民のルポルタージュ 残逆の世に寄する歌 改進黨的ユートピア 竜
 溪の『新社会』 反戦小説『火の柱』 尚江の転向

日露戦役・戦中戦後

二五

日露開戦 第一戦だけは勝つ 軍神第一号 旅順の死闘 戦後の苦難 革命と決戦と
 Z旗が揚る 惨澹たる勝利 戦後の生活 幻滅の悲哀 学問救世のねがい 議会主義か直
 接行動か 大逆事件 アジアの星

現実暴露の悲哀

二六

「美的生活とは何ぞや」 樽牛と天溪
「国家主義への跳躍」 抱月の留学
「懷疑と告白」 御風と天弦
「科学主義への信仰」 理想の破
「肉の人の懺悔録」 自然主義論
「肉の人の懺悔録」 自然主義論
の二大宝典

眞実の獵人たち

紅葉山人の死 竜土会の灰皿 雪の信濃 女弟子の出現 人生の従軍記者 社会文学か告
白文学か 中年の恋 自然主義と出歯亀事件 皮剥の苦痛 『田舎教師』の競作 旧家の
血 白鳥のニル アドミラリ 『耽溺』から『放浪』へ 『別れた妻に送る手紙』 生まれ
ながらの自然派 平面描写の極致

演劇運動の革新

自我をもとめて 文芸協会の出発 左団次と小山内 自由劇場の旗挙げ 『夜の宿』の試演
俳優養成の試み 新しい女性像 抱月と須磨子 「植ゑすてし」苗 カチュエーシヤの旋律
芸術から営利へ 大正の演劇・芸能 剣劇の英雄 浅草オペラのムード 大正戯曲時代
築地小劇場まで

夏目漱石とその世界

草分け名主の家柄 養育料貳百四十拾円也 獣世観の芽ばえ 幻聴と迫害妄想 貴族院書記官
長の娘 五高時代の教え子寺田寅彦 『草枕』のモデル 東大講師となる 小説家誕生
森田草平と煤煙事件 鈴木三重吉の処女作 「朝日新聞」の専属作家 修善寺の大患 博士
号問題の顛末 最晩年の心境

明治の知性

三三

死んで初めて石見に帰る 稀有の秀才 不本意な陸軍入り 異郷の青春 留学の収獲
『舞姫』の魅力と秘密 浪漫のかおり 戦闘的啓蒙の評論活動 小倉左遷の傷痕 雌伏と沈
潜の時代 美術品ラシキ妻 現代小説のラッシュ 『キタ・セクスアリス』と『青年』 燦
銀の情緒 歴史小説への転換 権威への疑問 古今独歩の史伝 終焉

退廃の美学

三六

荷風と上田敏の出会い 耽美派の文学運動の意義 最初の荷風ブーム 『新婦朝者日記』
慶応義塾文科教授 「三田文学」の創刊 不肖の子 はかない覚悟 江戸趣味への転身
花柳の巷 荷風と潤一郎 第二次「新思潮」 暗澹たる身辺 貴き肉の宝石 美の犠牲者
悪魔主義の造型

世紀末への憧憬

三九

新詩社の九州旅行 不可思議国の発見 新星「スバル」の誕生 牧羊神の躍り出づる日 金
と青との愁夜曲 江戸と西洋 「屋上庭園」の情調 発禁になった「おかる勘平」 バッカ
スとヴィナス 五色の酒 「失はれたるモナ・リザ」 宴の終わる

閉ざされた時代の証言

四三

号外を売る少年 民の叫びのなど悲しきや 「マカロフ提督追悼の詩」 国民は軍事費の奴隷
知られざる反戦詩人 あとはみな死刑だ テロリストのかなしき心 牧水と夕暮の位置
「NAKIWARAI」の詩人 大逆事件の文学的反映 非力な抗議 「うまれし国を恥づ」 全

太郎・茂吉・赤彦のばあい

特集・『明暗』まで

三三

『明暗』と漢詩制作
情」が目とするもの

アンビバレントな精神の持ち主
『草枕』から、『それから』へ

『人生』と『文学論』の意味
文明批評的小説

「非人

参考文献

日本文学年表

あとがき

四四六
四四八
四七七

写真特集

青い目の見た明治ニッポン

日本画の近代化

明治の新季語

薄幸の女主人公たち

武蔵野

足尾銅山

日露戦役

明治の出版社

30

54

80

110

140

172

198

224

藤村と小諸

本郷界限

新劇運動

猫の家

洋画の新傾向

パンの会の絵

明治天皇

254

256

286

330

364

390

420

装幀 大森 忠行

本卷執筆者（五十音順）

稲垣 達郎 内田 道雄 江 口 渙 岡 保 生 川 副 国 基
河竹 登志夫 楠 本 憲 吉 久保田 正文 高 田 瑞 穂 野 田 宇 太 郎
長 谷 川 泉 藤 村 道 生 宮 川 寅 雄 吉 田 精 一 和 田 謹 吾

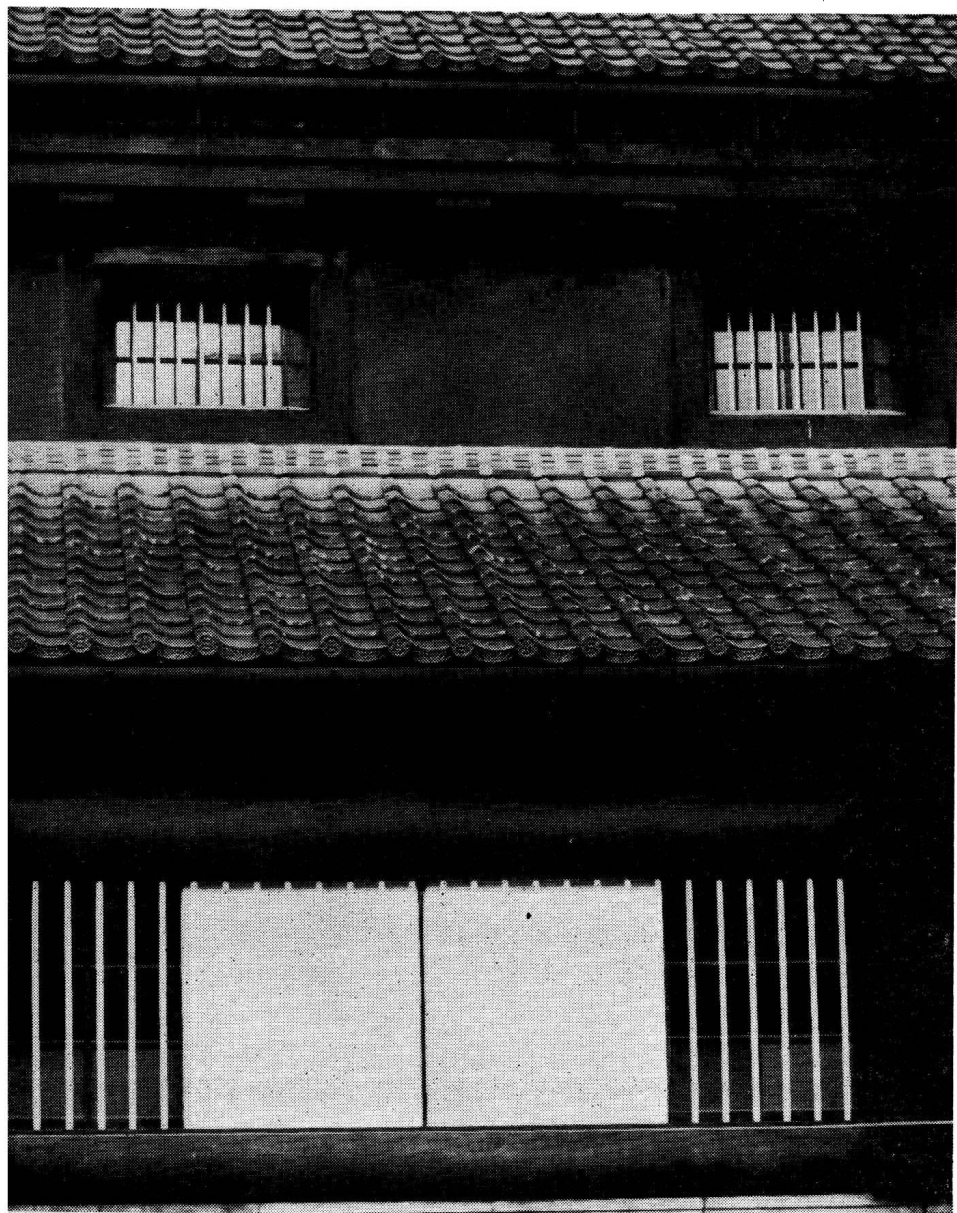
本巻協力者

紅野 敏郎 坂 上 博 一 佐 藤 勝 清 水 孝 之 野 山 嘉 正 八 田 元 夫
前田 ひさの 前 田 愛 武 川 忠 一 山 田 徳 兵 衛 山 田 有 策

国立国会図書館 近代史研究会 昭和女子大学近代文庫 新潮社 世界文化社 田川市立図書館
中央公論社 明治神宮 明治神宮聖徳記念絵画館 明治村 早稲田大学演劇博物館 早稲田大学
図書館

和魂洋才

安田銀行若松支店（明治村）



新世紀の開幕

三国干渉来たる

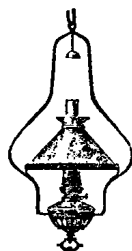
「国民新聞」の主幹、徳富蘇峰が征清大総督小松宮の随行を許されて宇品港から出帆、旅順に到着したのは、日清講和条約が成立した翌日のことであつた。明治二十八年（一八九五）四月十八日である。蘇峰は蒲鉾形の帆をかけた荷車に乗って、新しく日本の版図に加えられた遼東半島を視察して回つた。

柳は芽ぐみ、杏の花が今を盛りと咲きはこる新領土の春を満喫した蘇峰が、旅順に帰ってみると、そこにはたいへんな凶報が待ちうけていた。独・仏・露、三国の干渉を受け入れて遼東半島を還付せよとの詔勅が發布されたものである。蘇峰は三国干渉そのものよりも、彼らの干渉に屈した伊藤内閣の軟弱外交を憎

悪した。蘇峰はその自伝に、「このこと（三国干渉）を聞いて以来、予はほとんど精神的に別人となつた。而してこれといふも畢竟すれば力が足らぬ故である。力が足らなければ如何なる正義公道も半文の価値もないと確信するにいたつた」としている。これは国家主義者蘇峰の誕生を告げることばである。蘇峰は旅順を離れるにあたり、その地が日本の領土となつた記念として、波打ちぎわの小石や砂利を一にぎり、ハンカチに包んで持ち帰ることにした。

蘇峰から旅順の小石をおくられた国民新聞社社員、宮崎湖処子は

君がたまひしこのさざれ
旅順のものと同くからに



ランプ



渤海湾の波の音

これにもこもる心地して

とうたった。透谷の雑誌「平和」に寄稿したこともあるこのキリスト教徒も、三国干渉の報を聞いては、さすがに無念の思いをおさえきれなかったとみえる。民友社社員山路愛山も、蘇峰の転身に追隨して個人の自由よりも「国民の存在」が切要な問題となった、と説いた。

国家主義的感情の高揚は、蘇峰をいたたく民友社だけの問題ではなかった。このころ東京の誠まことの小学校の生徒だった平塚らいてうは、遼東半島を赤くぬりつぶ

三大国の干渉 下関条約調印後わず

か6日目の4月23日、独・仏・露の三国は日本に遼東半島の還付を要求した。日本の大陸進出はロシアの極東政策を脅かすものだったし、ドイツ、フランスはロシアへの接近によって東洋に勢力を伸ばそうとしていたからである。図は帝国主義勢力の分割競争における、日本の最初の試練をたくみに表現したもの。『現代漫画大観』所載。

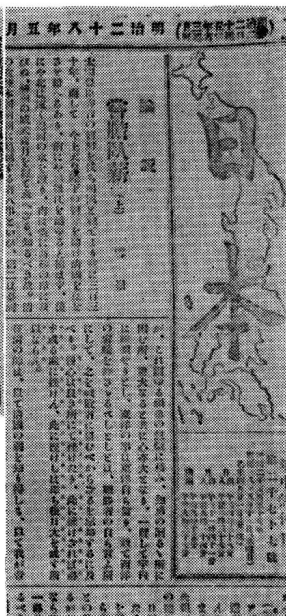
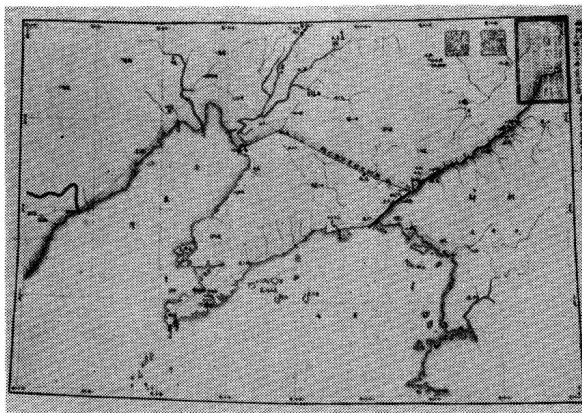
した極東の掛け地図と、先生が黒板に大書した臥薪嘗胆の文字が目にはやきついてはなれなかった、と回想している。さながら普仏戦争直後のアルザスを舞台にしたドーデの好短編『最後の授業』の一場面だが、独・仏・露三国、とくにロシアへの復讐を誓う国民感情は、らいてうのような若い者の魂までもとらえたわけである。まさに臥薪嘗胆は国民的スローガンとなっていたのである。

剃刀外相のリアリズム

臥薪嘗胆のスローガンのもと、愛国の情熱に浮かされた民衆とはうらはらに、政府高官の思考には冷徹なリアリズムが貫かれていた。

たとえば、剃刀外相とうたわれた陸奥宗光は、その名著『蹇々録』にもしるしているように、はやくから

遼東半島の割譲要求が三国干渉を誘発するであろうという正確な予断をくだしていた。国民の思いがった要求に従うならば列国の干渉はまぬがれぬ。しかし、国民の要求を無視するならば、どのような反抗が起こるか、予測はむずかしい。このジレンマに立たされた陸奥は、国内の危機よりも、列国の圧力を甘受するこ



臥薪嘗胆のスローガン のちの日露戦争で名高い旅順口を先端にもつ遼東半島の還付は、戦勝に酔っていた国民に冷水を浴びせた。が、「臥薪嘗胆」は内にあっては経済的な犠牲を国民にしい、外に向かつては大陸進出のムードを再編成するにこういう都合のいいことばとなった。三宅雪嶺は新聞「日本」で「此に挫折しは即ち後日大を成す所以ならん」と論じた。

とにしたのだ。うがった見方をすれば、彼は東洋の老大国を打ち破って有頂天になった国民に冷水を浴びせるために、あえて遼東半島の割譲を講和条約の条項に盛り込み、列国の干渉を挑発したともいえる。陸奥は明治天皇の側近佐々木高行にむかって、たとえ天皇が反対しても「内に顧慮するところがあって、遼東の割取は要求せねばならぬ」と語ったという。

伊藤内閣は臥薪嘗胆のスローガンをたくみに操作して、国論の分裂を防ぎ、富国強兵の統一体制をつくりあげることに成功した。明治二十八年末に開かれた戦後最初の第九議会は、膨大な軍備拡張十年計画をまるごとのみこんだ。民力休養をたてまえとして軍事費の増額に反対しつづけてきた自由党も、六個師団を十三個師団に増加する陸軍の拡張計画、三十九隻の新鋭艦を擁する海軍の建造計画を含むこの予算案に、まったく異議を唱えようとしなかった。二十九年度的の予算は一億七千万円のうち、軍事費はその四三パーセント、いっきょに七千三百万円にはねあがった。日清戦争以前の軍事費はほぼ二千万円台である。この大予算をまかなうための増税案は、二十九年度、三十年度で七千

五百万円を計上した。重税に対する国民の不满は、ロシアへの敵対感情にすりかえられてしまった。さらに清国から獲得した賠償金二億兩も、国民の福祉の増進に使われたのはきわめて僅少な部分で、その六〇パーセントが軍備拡張に投入された。

このように伊藤内閣が戦争の準備に異常な熱意を傾けたのは、帝政ロシアとの戦いが数年のうちには避けられないものと観測したからである。三国干渉の代償にロシアが旅順・大連の租借権を清国からもぎとったことによって、日露の利益線が朝鮮半島を挟んで衝突する事態の到来は、もはや時間の問題にすぎなくなっていた。

閔妃暗殺のクーデター

下関条約の直前に発行された『将来の大戦国民の覚悟』というパンフレットは、アジアにおける日本の位置をつぎのように説いている。

『**眈**を決して今日の形勢を視よ！ 若し夫れ欧米白哲人種の国を除かば其能く国を為すもの幾許ぞ。(中略) 我国今日の地位は即ち興亡の岐路に立つものなり。欧州人は天下を蚕食し来て漸く我国と土耳其

とを遺すのみ。然るに土耳其は彼れが如く、支那は此くの如く、然り而して我大日本帝国は自ら大を称すと雖ども、実は一小島国に過ぎず。而して今や風雲奔馳、將に狂瀾を捲て我此の孤島に押し寄せ来らんとするの兆候を示す。

日清戦争の勝利によって東洋最初の植民地帝国となつた日本は、帝国主義列強との抗争に巻き込まれざるをえない。アジアへの優越感と、「白哲人種」への危機感とが奇妙に入りまじつたこのパンフレットは、つぎのように十年後の日露戦争を正確に予言していた。

不測の大禍はみるみる天外より落下し来らんこと鏡に懸けて見るが如し。興亡の機目睫に迫る。大勝か、大敗か。霸業か、奴僕か。エジプトか、プロシヤか。特に此十年間に於て決するものあらんとす。戦後の日本は帝国主義の残酷な教師、欧米列強のやり口に見習つて、新領土台湾の植民地化と、清国の勢力を一掃した朝鮮の保護国化を強引におしすすめようとする。とくに明治二十八年十月の閔妃暗殺のクーデターは、その策謀の露骨さにおいて、日本が帝国主義の忠実な生徒であることを、遺憾なく証明してみせた

事件であった。

清国の宗属支配から脱した朝鮮には、清国にかわってロシアが進出し、閔妃ら親露派の勢力が台頭した。これに閔妃の宿敵である大院君一派が対立し、さらに朴泳孝らをいいたく日本党が加わって、三派三つ巴の政争が激化しはじめた。日清戦争後三か月もたたない七月には、日本派の首領朴が閔妃暗殺のかどで逮捕を命ぜられ、日本に再亡命するという事件が起こった。ロシア、アメリカのあと押しに自信を得た閔妃一派が、戦後の反日感情をたくみに利用して親日分子の駆逐に



惨殺された閔妃 明治28年10月7日、日本公使三浦梧棲の命を受けた朝鮮浪人岡本柳之助ら十数名は王宮に押し入り、王妃とおぼしき婦人3人を剣で殺し、そのあとで王妃のコレカミに禿のあることを聞き知って確認したという。ロシアと日本の争いがもとで起きた悲劇である。図は辻永筆「京城南大門」(聖徳記念絵画館蔵)

成功したのである。

七月の政変後、帰任した大物公使井上馨にかわって起用されたのは、長州奇兵隊生きのこりの親衛將軍三浦梧棲であった。三浦は、このころ京城で諺文の新聞を発行していた安達謙蔵から対朝鮮政策を尋ねられ、「どうせ一度は狐狩りをせねばならぬが、君の手もとに若い者がどれくらいいるか」と、物騒な質問を發した。狐とはいまでもなく閔妃のことである。十月七日、大院君をかつぎ出してのクーデターは決行され、朝鮮人に変装した「若い者」は閔妃を惨殺してしまう。「服装容貌優美ニシテ、王妃トモ思ハルベキモノハ、直チニ劍ヲモツテコレヲ殺戮スルコト三名ニオヨベリ」という残酷さであった。

このクーデターの報に驚いた日本政府は、三浦公使を召還、小村寿太郎を派遣してクーデター後設立された親日内閣のテコ入れに当たさせたが、諸外国の抗議、国王の痛憤、民衆の反日暴動などの不利な情勢にさらされた親日政権は半年ともちこたえることができなかった。翌年二月、反日の気運に乗じてロシアは親日派を追放、日本の政治的敗退は明らかになった。

産業革命

日清戦争後の軍備拡張にもなつて、工業や鉄道・海運など、近代産業に投下された資本は莫大な額に上つた。石川三四郎が「日清戦争は未だ資本家の自覚に因りて起りたるものとする能はざるべし。然れども日清戦争が資本家を誘ふて階級的自覚に入らしめたるは事実なり」と指摘しているように、日清戦争から日露戦争にいたる十年間に、明治日本は産業革命を迎えたのである。

官営企業の資本総額は日清戦後の十年間に七倍となり、民間企業のそれは六倍強に達した。官営企業では軍備拡張の最重要資材たる鉄鋼の供給を国内でまかなうために、八幡製鉄所の建設が計画され、一千四百万円の巨費がつぎこまれた。第一回の溶鉱炉火入れは明治三十四年であつたが、本格的な操業は日露戦争さなかの明治三十七年に開始された。民間企業では紡績業の発展がめざましかった。綿糸の生産は明治二十三年から日露戦争までの十五年間に七倍に増加した。また、^{すず}錘数は、明治二十七年には五十三万本であつたのが、明治三十七年には百三十四万本に増加した。このよう

な綿糸生産の増大とともに、その輸出も順調に伸び、

亡霊に悩まされた閔妃^{びんき}

明治時代屈指のジャーナリスト福地桜痴居士の作に『張嬪^{ちやうひん}』という朝鮮宮廷の秘史がある。出版は明治二十七年十二月で、日清戦争をあてこんだ一種の傑作といふことができる。

『張嬪』は、約三十年間に及ぶ大院君と閔妃との宮廷抗争の記録である。皇帝の寵妃張氏は、このイキの長い陰謀と暗闘の歴史に巻きこまれた薄幸の女性であつた。皇帝の実父大院君は外戚閔家一族の勢力をそぐために張氏を支援し、閔妃は張氏の寵をねたんで、ことごとくに彼女を迫害した。閔妃が幽囚の張氏を引き出して「鈍刀を以て手足の指を一ツづつ斬らせ」たあげく、惨殺してしまつたのは明治十八年のことであつた。その後、閔妃はしばしば張氏の怨霊に悩まされたといふが、三浦公使のクーデターによる閔妃の悲惨な最期もあるいは張氏のたたりであつたかもしれぬ。

明治十五年、大院君にそそのかされた兵士が宮中に乱入したとき、閔妃は妾を身代わりに立てて、危うく難をのがれたことになっているが、二十八年の時には身代わり策も役にたたぬ年齢に達していたのである。